



41 梵鐘^{ほんしょう}

種 別：有形文化財 工芸品（昭和 32 年 12 月 20 日 県指定）

所 在 地：久留米市山本町豊田 2287

アクセス：西鉄バス「山本支所前」下車徒歩 8 分

「あじさい寺」として親しまれている龍護山千光寺（曹洞宗）は、筑後在国司草野永平が建久 3 年（1192）、臨濟宗開祖の千光国師栄西を招いて創建し、応永^{おうえい} 27 年（1420）に度重なる火難を封じ、懐良親王の御霊を護るため、後小松天皇から「龍護山」の山号の勅額を賜ったといわれています。

この寺の鐘楼にかかる和鐘は総高 110 cm、笠形までの高さ 80cm、口径 62 cm の新式鐘で、^{えいわ} 永和 3 年（1377）の北朝年号（南朝年号は^{てんじゅう}天授 3 年）が刻銘されています。南朝の征西将宮懐良親王に関係の深いこの寺に、北朝年号が刻まれた鐘があることから、当時の複雑な世相をうかがい知ることができ、非常に貴重な存在となっています。



42 やなぎさか そね はげなみ き 柳坂曾根の櫨並木

種 別：天然記念物（昭和39年5月7日県指定）

所在地：久留米市山本町豊田

アクセス：西鉄バス「柳坂」下車すぐ

櫨はその実が木ロウの原料となり、^{ろうそく}蠟燭などに使用されることから江戸時代には特産品として、九州各地で栽培されていました。

久留米藩内では竹野郡亀王村（現在の田主丸町）の庄屋竹下武兵衛が、^{きょう}享保15年（1730）頃に、藩内で初めて植栽し、^{かんぼ}寛保2年（1742）には国分村（現在の国分町）や西久留米村（現在の西町）の鞍打に植えられたことが確認されています。

久留米藩は殖産興業の一環として櫨の植栽を大いに奨励し、その後、「松山櫨」や「伊吉櫨」といった改良種が筑後一円に広まったことで、櫨は米に次ぐ主要産物として、藩の財政を潤すようになりました。

柳坂曾根の櫨並木は、この時代の名残りであり、昭和39年（1964）に県の天然記念物として指定され、平成6年には新聞社の企画する新・街路樹百景にも選ばれました。また、平成9年にはここで採れた実を使って高さ103cm、重さ75kgの日本一の和蠟燭が造られました。



43-1 永勝寺の古瓦

種 別：有形文化財 考古資料（平成12年2月24日市指定）

所在地：久留米市山本町豊田2155

アクセス：西鉄バス「柳坂」下車徒歩15分

永勝寺の山号は柳坂山、本尊は薬師如来です。寺伝では天武天皇^{てんむてんのう}9年(680)に天武天皇の勅願により創建されたと伝わり、白河院の頃には本坊禅定坊を中心に36坊があったといえます。

鎌倉時代には大善寺・高良山・背振山などの僧とともに柳坂の僧蓮実坊嚴琳の活動が知られ、この寺の繁栄をうかがい知ることができます。戦国時代になると衰退し、天正18年(1590)には毛利秀包^{てんしやう}によって寺地が没収されてしまいましたが、江戸期は村人の手で守られ、明治10年(1877)に曹洞宗の寺院として再興されて現在に至っています。

境内から出土した瓦には奈良時代まで遡るものがあり、古代寺院が存在したことを裏付けています。また、「柳坂山 戊刃(寅)」の文字をもつ軒丸瓦は応永^{おうえい}5年(1398)のものだと推測され、当地方の瓦の歴史を探るうえで、重要な位置を占めています。



43-2 ^{えいしょうじ}永勝寺のケンポナシ

種 別：天然記念物（平成 5 年 6 月 22 日 市指定）

所 在 地：久留米市山本町豊田 2155

アクセス：西鉄バス「柳坂」下車徒歩 15 分

ケンポナシは、クロウメモドキ科のケンポナシ属の落葉高木で、永勝寺境内には、東側斜面及び南側の雑木林に数本見ることができます。雌雄同株で、果実は有毛で径が約 7 cm の球の形をしています。葉は広卵形をしており、葉脈が基部から 3 分割しているのが特徴です。開花は 6～7 月に見られます。果実の部分ではなく、果柄の肥大したものを食用としていました。やや甘味があり、味が梨に似ているところからこの名がついたといわれています。また薬用としても用いられていました。

境内のものは、植樹されたものかわかりませんが、僧侶が果柄を蜂蜜と調合して薬用として利用したものとも思われます。



やなぎさか
44 柳坂のアカメヤナギ

種 別：天然記念物（平成 5 年 6 月 22 日 市指定）

所 在 地：久留米市山本町豊田 2151

アクセス：西鉄バス「柳坂」下車徒歩 15 分

アカメヤナギは、双子葉植物、離弁花類、ヤナギ科、ヤナギ属の落葉高木です。分布は、本州の関東地方以南と四国・九州に及び川縁や湿地に一本立ちとして見られます。名前の由来は、新芽がやや赤みを帯びていることから呼ばれています。

柳坂のアカメヤナギは、耳納山地の裾で扇状地へと広がる付根にあり、周囲は沢が流れ、杉の樹林のなかに一本立ちして生息しています。地元では「柳坂」の地名の由来と伝承され、樹齢も 200 年以上と推定されており、すでに壮年期を越えています。樹勢は旺盛です。

「アカメヤナギ」が地名の由来という伝承の確証はありませんが、「柳坂」の地名は、永勝寺とともに建久 6 年 (1195) と承久 3 年 (1221) に著された文献に見られ、中世から存在したことがわかります。

45 うえの けじゅうたくおなりのま 上野家 住宅御成間

種 別：有形文化財 建造物 平成 16 年 2 月 18 日 県指定

所 在 地：久留米市山本町豊田 1755-1

アクセス：西鉄バス「下野」「柳坂」下車徒歩 5 分

ぶんきゆう
文久 4 年 (1864) の家相図では、方形の宅地の南西部に主屋と現在の御成間を配置し、その北には離屋を、敷地の北東部には複数の土蔵と屋敷神の配置が描かれています。南側には長屋門ながやもんが建ちます。現在、大庄屋を勤めた当時の主屋と付属屋 (土蔵・長屋門他) は失われましたが、広大な屋敷地の中で池泉を有する庭園と御成間、往時を偲ばせる建物基礎や石垣が残っています。

御成間とは藩主などが宿泊・休憩などに使用した建物です。この御成間は敷地南東隅の庭園に面して建てられ、建物外観は寄棟、真壁造平屋建の建物です。間取りは九畳敷の「上の間」「次の間」と北に畳敷と板敷の二つの小部屋を配置し、庭園に面する二方に縁、西には廊下を巡らす平面形式をとります。



室内は「上の間」「次の間」ともに潜りがつく幅一間の床の間を構え、さおぶちてんじょう 竿縁天井とうちのりなげし 内法長押で質素に飾られます。

御成間は 19 世紀初頭の文化年間に建設されたもので、簡素であるが風格ある空間と意匠を呈し藩主を迎えるの相応しい内容をもち、庭園も建物と一体となった優れた歴史的風致をもっています。大庄屋屋敷の建築遺構が残された例は報告されておらず、大庄屋屋敷の重要な構成要素の一部として上野家住宅御成間は貴重な歴史遺産であると言えます。



46 上野家庭園 うえの けいていえん 附 つけたり 文久4年・明治38年家相図 ぶんきゅう 4ねん・めいじ 38ねん かそうず

種 別：名勝（平成12年2月24日市指定）

所在地：久留米市山本町豊田1755-1

アクセス：西鉄バス「下野」「柳坂」下車徒歩5分

上野家は豊後大友氏の家臣でしたが、てんしょう天正10年(1582)に大友氏を離れ、山本郡柳坂村に定着した家です。江戸時代は山本郡柳坂組の大庄屋を勤め、寛永19年(1642)に上野太兵衛が就任して以来、享保7年(1722)から元文2年(1737)の間に一時外れますが、てんぽう天保3年(1832)に辞任するまで大庄屋を勤めています。

久留米市内には各地域ごとに夜明組・安居野組・五郎丸組・津福組など、多くの大庄屋組がありましたが、当時の大庄屋の家構は残っておらず、縮小したとはいえ建物と庭園が残っているのは貴重です。

庭は、屋敷の南面に広がり、形式は池泉を中心とした回遊式の形態を採用しています。さらに遠景の兜山を借景として、奥深い無限の広がりを感じさせます。池の北側には御成間とよばれる麦藁葺寄棟造りの建物がたちます。藩主などの御成りを迎える建物であり、細部にわたって丁寧な造りで、庭と一体となって優しい雰囲気醸しだしています。

附指定のぶんきゅう文久4年(1864)、明治38年(1905)の家相図などから、庭園と御成間の建設時期は幕末から明治初期と推定されています。貴重な庭園と建物として、久留米市最初の名勝指定となりました。



表面



裏面

47 やまもとぐん みいぐんぐんかいひょう 山本郡・御井郡郡界標

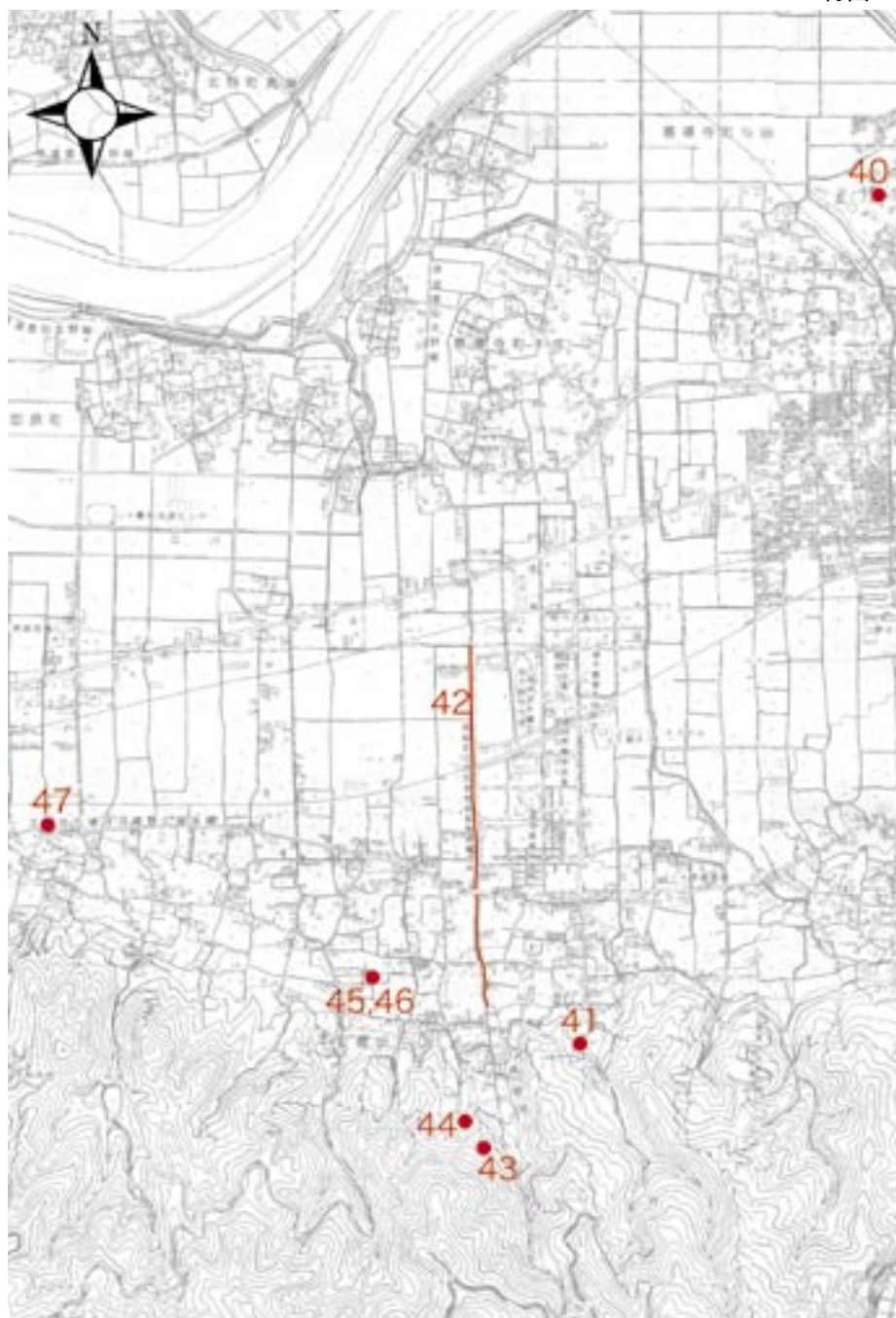
種 別：有形民俗文化財（昭和 49 年 4 月 25 日 市指定）

所 在 地：久留米市山本町豊田 1-1

アクセス：西鉄バス「放光寺」下車徒歩 5 分

江戸時代、久留米藩は参府街道とともに豊後国や肥前国へ通じる街道を整備しました。そのなかで天領のある日田へ通じる街道として、耳納山地の北麓を通り草野を経る山辺道と、筑後川沿いを通り田主丸を経る中道などを整備しました。久留米から豊後国までには 4 郡（御井郡・山本郡・竹野郡・生葉郡）を通り抜けますが、街道筋の郡界にはそれぞれ境界標が建てられたようです。

この郡界標は、山辺道の山本郡と御井郡の境に建てられたものです。標石は、22.5cm 方、地表高 195cm の方柱で、表面に（道路に面する）「東山本郡・西御井郡分界」、裏面に「元禄八年(1695)次乙亥十一月日建焉」の文字が刻み込まれています。また同じ「山本郡・御井郡」の郡界標が中道で太郎原町と善導寺町の境である、津遊川付近にもあったようです。その他に「山本郡・竹野郡」郡界標が大橋町合楽に、さらに藤山町から広川町を経る街道にも「御井郡・上妻郡」郡界標が見られます。郡界標は、本来木製であったようですが、『米府年表』に元禄 10 年、切石に取り替えた記事があります。





もくぞうしゃかによらいざぞう
48 木造釈迦如来坐像

種 別：有形文化財 彫刻（昭和 33 年 11 月 13 日 県指定）

所 在 地：久留米市山川神代一丁目 5 - 21

アクセス：西鉄バス「野口」下車徒歩 5 分

安国寺は禅宗南禅寺派の末流にあり、寺伝によるとその創建は前身であるくましろざん神代山万法寺を、足利直義がりやくおう暦応年間（1338～9）に各国一寺の安国寺としたといわれています。

それに対してこの仏像はその銘によると、製作は建長 6 年（1254）であり、またけんげん乾元 2 年（1303）、かんぶん寛文 9 年（1669）に修理の記録があります。記録から見ると、この仏像は、安国寺創建以前に造られたことになりませんが、安国寺に安置された時期や元の場所については今のところわかっていません。

高さ 115 cm のこの仏像は、ぎよくがん玉眼・びやくごう白毫水晶入り、らほつ螺髪は所々欠けていますが、堂々とした体軀をしています。手は与願印を示し、れんげ蓮華座に座っています。また衣文などに、鎌倉初期の様式が見られます。



49 動乱蜂 どうらんばち

種 別：無形民俗文化財（昭和 31 年 1 月 19 日 県指定）

所 在 地：久留米市山川町 569 王子若宮八幡宮内

アクセス：西鉄バス「追分」下車徒歩 10 分

動乱蜂は、毎年 9 月 15 日、山川町の王子若宮八幡宮内にて悪疫退散、こ五穀豊穰こくほうじょうを祈願し、仕掛花火を豪快に打ち上げる民俗行事です。かつて久留米藩に砲術をもって仕えていた山川町本村の古川家が、この地区の人々に仕掛花火を伝授したものが動乱蜂として伝えられたもので、今も地元の皆さんにより守られています。

「親蜂」「小蜂」「爆音」「仕掛」などと呼ばれる仕掛花火 50 本ほどで組み上げられた「蜂ノ巣」が準備され、この蜂ノ巣を境内にある池のほとりにある松のこずえに吊り下げます。そして、これに一齐に点火します。すると、火の粉が四方から飛び、一瞬にして炸裂音さくれつが起こり、怒り狂ったクマバチのごとく親蜂や小蜂が火炎を上げて夜空に舞い上がります。その様子は、まさに動乱蜂の名前そのままです。

50 高良山の文化財

高良山は耳納山地の西端に位置し、毘沙門岳(森林公園の上)を主峰とする標高312mの山です。この山は「高牟礼山」あるいは「不瀦山」とも呼ばれており、山頂に立てば眼下に筑後川をはじめ、筑前・筑後・肥前に広がる大平野を見渡すことができます。中腹には筑後一の宮の高良大社が鎮座し、山腹には古代の山城といわれる神籠石が築かれています。

南北朝時代には征西将軍宮懐良親王が高良山に陣を構え、この時代から戦国時代にかけて多くの城が築かれました。また、神仏習合時代には26寺360坊があったといわれるように、古くから霊山として人々の信仰の対象ともなっており、あらゆる意味で久留米ひいては筑後地方を代表する山でした。このため、歴史を物語る多くの文化財が残っています。

50-1 高良大社本殿・幣殿・拝殿、大鳥居

種別：重要文化財 建造物(昭和47年5月15日国指定)

所在地：久留米市御井町1

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩30分

大社の創建は、履中天皇元年(400)と伝えられていますが、正史上初めてその名が見えるのは延暦14年(795)です。

現在の社殿は、久留米藩第3代藩主有馬頼利の寄進により、明暦2年(1656)から寛文元年(1661)にかけて造営されたもので、普請奉行は丹羽頼母、大工棟梁は深谷平三郎で久留米藩の事業として進められました。

神殿の形式は日光東照宮に代表される建築様式で、本殿と拝殿の間に幣殿が入る権現造です。本殿は、正面3間、側面3間の入母屋造で入口は平入になっています。幣殿は正面3間、側面3間、切妻造で、拝殿は正面5間、側面3間の入母屋造です。

また、拝殿、幣殿の天井絵は、宝暦5年(1755)第7代久留米藩主有馬頼隆の命により、御用絵師三谷仙雪が描いたもので、金箔地に格子ごとに墨や彩色で、花鳥風月等が描かれています。

昭和48年から51年にかけて大規模な解体修理が行なわれ、檜皮葺から創建時の柿葺になりました。



大鳥居は、高良山の麓^{ふもと}の参道入り口にあります。石造の大鳥居で、承応^{じょうおう}4年(1655)第2代藩主有馬忠頼が寄進したものです。鳥居の形式は、一般にどこの神社でも見られる「明神鳥居」と呼ばれ「島木系^{しまぎ}」の代表です。島木系は、上部材の笠木^{かさぎ}が二重になっているものをいい、その下部分を島木といいます。笠木の下には柱を貫いて「貫^{ぬき}」があり、笠木と貫の間に「額束^{かくづか}」が懸けられた種類です。玉垂宮と表記された額束は、一段と大きくその存在を表しています。





こうらさんみ たらいばし
50-2 高良山御手洗橋

種 別：有形文化財 建造物（平成 14 年 4 月 5 日 県指定）

所在地：久留米市御井町 206 - 1 他

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩 8 分

高良山の旧参道を登っていくと池につきあたりますが、この池に架かっている橋が御手洗橋です。高良の神がこの池で口をそそぎ、手を洗われたという伝説から、この池は御手洗池と呼ばれています。

中世末に描かれた高良山縁起にも橋が見えますが、橋の様子が分かってくるのは江戸時代中期からです。享保年間（1716～1736）に橋が架けられたとあり、また、安永元年（1772）に高良山の放生池御手洗橋が完成したという記録があります。この時期の橋は、一般的には木造であったようです。

石橋になったのは享和 3 年（1803）です。桁行 5 間、梁行 2 間の規模をもち、その両側に袖高欄がつく桁橋です。石材はうきは市の山北石のようです。

擬宝珠柱には安永 2 年銘の銅製の金物がついていますが、享和 3 年の再建の際に橋の歴史を伝えるために再利用されたものです。この金物は久留米藩の御用鋳物師植木家の作品でもあります。建造年代がわかり、保存状態もよく由緒もある石橋として高く評価されています。



縁起図

けんぽんちやくしよくこうら たいしゃえんぎ
50-3 絹本 著 色 高良大社縁起

種 別：有形文化財 絵画（昭和50年8月14日県指定）

絵縁起と呼ばれるもので、この種の縁起では最も大きい部類に入り、筆致は精密で縁起図と山内図の2幅からなります。

縁起図は237 cm × 207cm。画面の上半分を横にたなびく雲形で区切り、神功皇后の「朝鮮半島出兵の物語」をその準備から高良神の活躍による勝利、宇美宮の皇子誕生などの場面を描き、下半はそのクライマックスである彼我の攻防戦を大きく描いています。



山内図

山内図は、328.3 cm × 212.5 cm。画面いっぱいに西から見下ろした高良山の全景を描いています。最上部中央に回廊で囲まれる高良社の社殿を描き、そこから山麓の門前町府中に至るまで、蛇行する参道には参詣する人々がみえます。この山内図に描かれた情景は『高良玉垂宮神秘書』が伝えるところに良く合致し、神仏習合時代の高良山と門前町の繁栄を良く表しています。

製作時期は天文^{てんぶん} 23 年 (1554) 以降の慶長^{けいちょう} 8 年 (1603)、寛永^{かんえい} 12 年 (1635) と 3 回の修理銘の写しが伝わりますが、確定はできていません。



50-4 紙本墨書平家物語^{しほんぼくしょへいけものがたり}

種別：重要文化財 書跡（明治44年4月17日国指定）

平家物語は琵琶法師が語った物語で、平家一門の興隆から衰亡までを仏教的無常観に基づき書かれた叙事詩的な物語です。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり」で始まる文体は、和漢混交文の典型とされています。

当初は3巻本だったようですが、13世紀中頃に6巻本へ、更に12巻本へと成長し、14世紀初めに如一という名人が灌頂巻を付した平家物語ができました。この如一の平家を大成して、一方流を確立したのが覚一です。

覚一は播磨（兵庫県）書写山の僧侶でしたが、失明しこの道に進みました。書写山で学んだ声明の曲節や読経の旋律を取り入れ一方流を確立させました。さらに、後年詞章の混乱などが起きることを恐れ、応安4年（1371）に師説を筆録させ、弟子定一に譲ったものが「覚一本平家物語」です。

現在転写本が6本あり、高良大社所蔵本と京都龍谷大学所蔵本が特に注目されています。高良山の僧寂春が寛政9年（1797）11月、玉垂宮神庫に納めたものです。

50-5 高良大社所蔵文書

種 別：有形文化財 書跡（昭和 50 年 8 月 14 日 県指定）

高良大社が所蔵する文書群で、筑後地方の歴史を語る基本史料です。指定された文書は、^{さいこう てんぎょう} 天慶文書 1 巻、^{せいか} 社家文書（^{きんざん} 鏡山家文書・^{すけ} 宗崎家文書・^{すゑ} 座主家文書・^こ 古文書再写）6 巻、^{ぶんろく} 文禄文書 1 冊、^{たか} 尊能文書 1 巻、^{たか} 高良玉垂宮神秘書（含紙背文書）・^{たか} 玉垂宮大祭祀 2 巻からなります。

^{さいこう} 天慶文書は、^{さいこう} 天慶 3 年 (856) の^な 名神御厨 宛筑後国符（存疑）と、^{てん} 天慶 7 年 (944) 記録の筑後国内神名帳で、後者は現存する国内神名帳のうち最古のものとして知られています。

^{せいか} 社家文書 6 巻 97 通は、^{おほほふり} 大祝・^{ぎすぼろ} 大宮司・^{すゑ} 座主坊宛の鎌倉末期から江戸中期に及ぶ、^{きしん} 寄進状・^{あんどう} 安堵状・^{しよ} 書状等です。文書の発給者は、^{たか} 大友・^{りゅう} 龍造寺・^{とよ} 豊臣・^{うま} 有馬など、九州の政治史上に活動した諸氏からのものです。

^{ぶんろく} 文禄文書は、^{ぶんろく} 文禄 2 年 (1593) の神領知行付（高良社神職の知行地と知行高を記したもの）です。^{けん} 尊能文書は、^{げん} 元和 6 年 (1620) に座主尊能が幕府に復興を嘆願した訴状です。

『高良玉垂宮神秘書（高良記）』は、^{せいか} 大祝家伝来の秘書であり、戦国時代の成立と思われる、祭神の由緒などが記されています。玉垂宮大祭祀は、祭礼・神幸の次第等を記した中世文書です。



天慶文書（筑後国内神名帳）



宗崎家文書



鏡山家文書
大友宗麟繼目安堵状



高良玉垂宮神秘書



こうらさんししまい
50-6 高良山獅子舞

種 別：無形民俗文化財（平成 10 年 7 月 29 日 市指定）

所 在 地：久留米市御井町 212

獅子は、神が現れるときの姿（権現^{ごんげん}）であり、暴れる獅子が悪霊を祓うと信じられ、この獅子舞を「権現舞」と呼びます。筑後地方の獅子舞は、古くは三潯荘夜明に住む梅津家^{でんがく}が田楽・竹の舞とともにつかさどっていました。

高良山獅子舞が地元住民によって奉納されるようになったのは、寛文 9 年（1669）以降であるといわれています。明治になり、「高良山同志会」が結成され、獅子舞と風流を奉納し、獅子舞は御神幸の際魔祓いとして先頭に立ち、要所で「舞い」を舞いました。昭和 36 年（1961）以降、御神幸祭が中止されるとともに獅子舞も中断しましたが、昭和 52 年「高良山同志会」が再結成され、「高良山元旦祭」、「高良山おくんち（10 月 10 日）」の日に社前にて奉納されます。

筑後の獅子舞は、「祓い」を基本とした荒れ獅子ですが、高良山獅子舞はこの「祓い」の意味をもっとも単純・厳粛な形で表現しており、古風が守り続けられて来たことが伺われます。



50-7 ^{み いまち ふりゅう} 御井町風流

種 別：無形民俗文化財（平成 10 年 7 月 29 日 市指定）

所 在 地：久留米市御井町 1

「風流」は、田植えにおいて、天空から「田の神」を勧請し、太鼓を叩いて囃し、豊年を祈願する神事「田楽^{でんがく}」から変化したものです。

筑後地方に伝承される「風流」は、分類上では九州一円に広がる「太鼓楽」で、中央に 1 基または 2 基の大太鼓を、伝えられた打法で打ちまくります。御井町風流においては、2 基の大太鼓が据えられています。

御井町風流がいつから始まったかは不明ですが、『高良玉垂宮神秘書』等に記されるように、古来高良山では神幸行事の際に「田楽」が行われていたことから中世以降と考えられます。

高良山獅子舞と同様、一時中断されていましたが、昭和 52 年 (1977) に「御井町風流保存会」が結成され、獅子舞とともに「高良山元旦祭」・「高良山おくんち」で実施されます。



50-8 ^{まがいしゅじさんぞん いわふどう} 磨崖種子三尊 (岩不動)

種 別：史跡（昭和62年2月21日市指定）

所 在 地：久留米市御井町297-1

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩20分

西鉄バス「矢取」下車徒歩10分

磨崖種子三尊は通称「岩不動」と呼ばれ、高良山^{あたご}愛宕神社南側の岩の露頭に、地蔵菩薩^{じぞうぼさつ}を中心に右に不動明王^{ふどうみょうおう}と左に毘沙門天^{びしゃもんでん}の三尊の種子（仏をあらわす梵字）を刻んだものです。種子の彫りは深く、薬研彫り^{やげん}りで、中に朱が塗布されています。

愛宕神社の祭神の本地仏が地藏菩薩であり、また、境内には文字を彫る石が三つあり、不動像、毘沙門像、地藏像とあったという『^{だざいかないし}太宰管内志』の記事から、この種子三尊も愛宕神社の信仰と深い関係があるようです。さらに、『高良山古蹟聞書^{こせきききがき}』にはこの種子の筆跡は高良山50世座主寂源僧正のものという記述もあり、高良山の歴史と深い関係を持つ史跡です。



50-9 こうらさんこうごいし 高良山神籠石

種 別：史跡（昭和 28 年 11 月 14 日 国指定）

（昭和 51 年、平成元年追加指定）

所 在 地：久留米市御井町 1 ほか

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩 15 分

古くから鬼が築いたという伝説がある高良山神籠石は、久留米市御井町の高良山にある 7 世紀のころの古代山城遺跡です。高良大社背後の本宮山頂の東側を最高地点（標高 251 m）として山の南側を順次下って、西裾の二つの谷を渡り、1.5km ほど列石が連なります。二つの谷には水門施設があったと考えられ、南谷には水門基底部の石組みが残りますが、北谷の水門については不明です。

北谷から北北西へ約 100 m 列石が確認されますが、それから先の北側斜面に列石はなく、本来築かれなかったものか、あるいは『日本書紀』に記される天武天皇 7 年 12 月 (679) の「筑紫地震」によって発生した土石流で崩壊したという説もあります。

神籠石の名の由来は、列石内の参道中腹にある「馬蹄石^{ばていせき}」とよばれるものです。類似の遺跡は杷木神籠石や、みやま市の女山神籠石^{めやま}など全国に 10 数ヶ所確認されており、神籠石の名称の発祥地として学史上でも著名な遺跡です。



50-10 ^{こうらさん}高良山のモウソウキンメイチク林 ^{りん}

種 別：天然記念物（昭和49年11月25日国指定）

所在地：久留米市御井町1

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩30分

モウソウキンメイチクは、イネ科に属し、中国原産のモウソウチクの変異種で、漢字では「孟宗金明竹」と書きます。昔から珍しいとされ、江戸時代、この竹が見つかり、かわら版で騒がれたといえます。

この金明竹は、表皮3層が変化して、黄金色の中に緑色の縦縞が節間に交互に現れたものです。また竹の皮には、黒い斑点があり、葉には葉脈の中に白線が見られるものもあります。

モウソウキンメイチクの発生は、極めて稀で、非常に貴重な存在であり、国の天然記念物として指定を受けているのは、高良山以外に宮崎県延岡市の祝子川^{ほうりがわ}モウソウキンメイチク竹林があるだけです。その他、遠賀郡岡垣町高倉や高知県高岡郡日高村^{くさか}日下などでも見ることができます。

真竹のキンメイチクとしては、^{くぐみや}久喜宮のキンメイチク（朝倉市）・^{しのはら}篠原のキンメイチク（石川県）・^{しきしま}敷島のキンメイチク（群馬県）が国指定の天然記念物となっています。



50-11 ^{こうらたいしゃ}高良大社の^{ぐんせいち}ツツジ群生地

種 別：天然記念物（平成13年3月27日市指定）

久留米ツツジは江戸時代末、久留米藩士坂本元蔵（1785～1854）がキリシマツツジを原種として苦心の末、新種の育成に成功したことでよく知られています。坂本は、高良山と梅林寺のキリシマツツジから種子を採取しましたが、現在梅林寺境内にはツツジ古木は見当たらず、ツツジ古木群生は高良山に残るのみになっています。

ツツジ群生地は高良大社社殿の背後から南側の^{がけ}崖斜面にあり、樹齢200年を越えると推定され、久留米ツツジの原木の可能性が高いものです。

^{かんせい}寛政元年（1789）に高良山^{ざんす}座主伝雄僧正が著した「高良山近時図」にはこのツツジは描かれず、^{てんぽう}天保7年（1836）の「高良山略図」にツツジ群落とおぼしき^{かんぼく}灌木が描かれていることから、植え込まれたのはこの間のことです。寛政4年に千四百年御神忌大祭が盛大に行われており、この大祭にあわせて境内の整備が行われた時に、植え込まれたものと推測されています。



50-12 高良大社の樟樹

種 別：天然記念物（昭和 39 年 5 月 7 日 県指定）

高良大社では、御樋代（ご神体の容器）などが樟くすのきで作られていたため、樟を神聖視し、社殿はもとより日常の用具に至るまで、一切樟材を使用してはならない定めがあったといわれています。

この樟樹は、相当に老齢のもので、高良山中興の祖、座主寂源ぎすが植樹したと伝えられ、正参道の樟樹で大社の御神木として永く崇められてきました。しかし、拝殿の正面に直通の参道が設置されてからは、人目に触れることが少なくなりました。

指定された樹木は 2 本あり、双方合わせて地際約 30 m あります。1 号樹の根回りは、相当の根上りを見せており、全体として樹形は美しく、根元から約 2 m のところで双幹となっています。樹高約 24 m、周囲目どおり約 9 m を測ります。2 号樹は、樹高約 24 m、周囲目どおり約 4.7 m を測ります。枝張りは、東へ約 15.5 m、西へ約 19.0 m、南へ約 16.0 m、北へ約 18.5 m の広がりを見せ、雄大さを表しています。



狛形



阿形

50-13 高樹神社の石造狛犬

種 別：有形民俗文化財（昭和 59 年 6 月 29 日 市指定）

所 在 地：久留米市御井町 121 高樹神社内

アクセス：西鉄バス「御井町」下車徒歩 8 分

高樹神社は、「高牟礼権現^{たかむれごんげん}」とも呼ばれ、古来高良山の地主神と伝えられており、元慶 2 年 (877)11 月に、時の朝廷より従五位の位を授けられたという記録があります。寛文 10 年 (1670) に再建され、宝暦 2 年 (1752) には現在の場所に社が造られ、明治 6 年 (1873)3 月に郷社になりました。

境内にある 1 対の石造狛犬は、社頭の狛犬としては小型で、阿形が体高 48cm、全長 50 cm、狛形が体高 52 cm、全長 52cm になります。特徴的なのは、^{うん}狛形の方が右足で玉を抑えているところで、これは古い様式に見られるものです。

阿形台石には「享保九龍次甲辰五月廿四日」(1724) の銘があり、神殿前庭にある狛犬としては、筑後地方最古のものであります。また石工銘は見当たりませんが、^{やまきた}山北石工の手になるものと思われ、山北型狛犬の祖形として注目されます。



うましみず み いじんじゃ
51 味水御井神社のクロガネモチ

種 別：天然記念物（平成 20 年 3 月 日県指定）

所 在 地：久留米市御井朝妻 1 丁目

アクセス：西鉄バス合川バス停下車徒歩 3 分

クロガネモチは、モチノキ科モチノキ属の常緑高木で雌雄異株^{しゅう}、日本では本州中南部静岡以西と四国・九州・沖縄に分布します。

本樹は雄株で樹高 19.71 m、胸高周囲 4.06 mを測り、県内では最大級のクロガネモチです。また、全国の都道府県指定を受けた同種は現在 11 件ですがその中でも上位の規模を有します。

味水御井神社のクロガネモチは枝張りも良く、樹形の美しさに優れ、樹勢も旺盛であるとともに、神社境内に生育することから、地域とのつながりも深い巨木です。